

カナダの地方都市における青少年のスポーツに対する志向  
：地域スポーツプログラム参加者調査から

北村尚浩\*

Orientation toward sport of Canadian youth: the research on participants of community sport programs

National Institute of Fitness and Sports  
Takahiro KITAMURA

Abstract

In Canada, the community sport club assumes the important role of providing opportunities for children to participate in sports. Most community sport programs have both recreational and competitive programs. Children can choose their programs according to their own skills and interests. Furthermore, because almost all recreational programs are seasonally based, the children's opportunity to choose from a wider variety of sports is expanded. On the other hand, most sport activities of children have been left to school athletic clubs in Japan. Furthermore, it is no overstatement to say that the Junior Sport Club is the only organized sport activity for children in a community. In such a situation, a school athletic club faces problems such as insufficient members, brought about by a decrease in the birthrate and a shortage of teachers who can coach an athletic club. Junior Sport Club also has some problems such as sport injury or burnout prevail, often caused by over professionalization.

The purpose of this study was to clarify the orientation toward sport of youth athletes who participate in community sport programs in Canada and to perform comparison by sex and sport enforcement situations. The questionnaire research focused upon members of the *Affiliated Minor Sport Groups* in the City of Kitchener, Ontario, Canada from April to July in 2000. The scale developed by Webb (1969) was used to measure orientation toward sports (Best, Beat and Fair), then it was compared with a sex, continuation years, frequency of sports participation and the athlete's competition level. The main results are as follows:

1. Athletes think that the most important in playing a game is to play it as well as they can. This means that their orientation toward sport is "Best" orientation.
2. The male athletes showed stronger "Best" orientation toward sport than the females.
3. The athletes with shorter continuity in their given sport, showed stronger "Beat" orientation toward sport than the long-term athletes.
4. "Best" orientation toward sport in national level athletes is stronger than "Beat" orientation.

These results show that youth who participate in community sport programs in Canada mainly display

---

\* 鹿屋体育大学体育学部 National Institute of Fitness and Sports

display “Best” orientation toward their sport and that this differs according to sex, continuity and competition levels.

KEY WORDS: *Orientation toward sport, youth, community sports programs, and Canada*

## 緒言

近年、日本で設立の機運が高まっている総合型地域スポーツクラブは、ヨーロッパ、特にドイツの地域スポーツクラブを手本にしているものが多いが、カナダにおいてもヨーロッパ諸国と同様に、地域のスポーツクラブが青少年のスポーツ機会提供の場として大きな役割を担っている。カナダ人の5歳から14歳までのスポーツ参加率は54%であるが (Sport Canada, 2000)、日本の中学生の運動部活動加入率73%あまり (文部省, 1996) であることと、カナダにおいては学校のスポーツクラブが日本の運動部活動ほど一般的ではないことをあわせて考えると、カナダの青少年スポーツにおける地域のスポーツクラブの役割は、決して小さくはない。オンタリオ州キッチェナー市では、年間42万6,000カナダドル、日本円にして約3,400万円を地域スポーツクラブへの補助金として交付しており、地域におけるスポーツクラブの運営、すなわちスポーツプログラムの提供が、住民サービスの一つとして捉えられている様子がうかがえる。一口に地域スポーツクラブといっても、娯楽的要素が強いレクリエーション・プログラム (Recreation program) と競技力の向上を目的とした競技力向上プログラム (Competitive program) の2種類が用意されており、参加している選手たちのレベルも市内リーグから全国大会入賞者まで、まちまちである。

一方、日本では、青少年のスポーツ活動のほとんどは、学校運動部にゆだねられているのが現状である。スポーツ振興基本計画 (2000) に見られるように、総合型地域スポーツクラブの整備が政策目標として掲げられているが、まだ緒についたばかりでこれからの発展が待たれている。そのような中であって、地域における青少年のスポーツ参加の機会として代表的なものに、スポーツ少年

団があげられる。全国に90万人を超える団員を擁し3万4千あまりの少年団が活動している。ところが、このうちの80%以上が単一の種目しか実施しておらず、そのことが過度の勝利志向を生み出す可能性も示唆されており、一部の少年団による過度の勝利志向の弊害も指摘されている (松尾ら, 1990; 藤田・藤原, 1992)。同様のことが中学校、高等学校の運動部活動にも言える。文部省 (現文部科学省) の調査では、運動部員の8割近くの者が所属している運動部が勝利志向であると感じていることや、スポーツドクターに対する調査でも、過度の勝利志向がスポーツ外傷・障害の原因として多く関わっていることが指摘されている (文部省, 1996)。

尾縣 (2000) は、子供のスポーツにおける勝利至上主義が、過度の練習と早期専門化をもたらす指導者に対する不信任や、スポーツに対する嫌悪感を生み出すと指摘しており、そのことがバーンアウトの素因となるとしている。過度の勝利志向によってもたらされる過度の練習が、発育発達期にある子供たちの身体や精神に大きな負担を強いっていることは、容易に推察できよう。青少年期のスポーツ活動は、身体的な発達に対する貢献のみならず精神的・社会的発達にとってもきわめて有効である (落合, 1997)。また、生涯にわたってスポーツに関わっていこうとする態度形成にとっても、重要な意味を持つ。しかしながら、先述のように、過度の勝利志向がもたらす過度の練習や早期専門化はスポーツ障害やドロップアウト、バーンアウトを生じさせ、スポーツに対するネガティブな感情を子供たちの心に植えつけ、スポーツから遠ざけてしまう可能性も十分に考えられる。Olick (1974) や McPherson (1980) が指摘してきたように、一度スポーツに対してネガティブな感情を持った子供たちは、たとえ勝利に関係のないレクリエーション的な場面においても、スポー

ツを敬遠するようになるのである。青少年期におけるスポーツの在り方は、その後の人生におけるスポーツとの関わり方に重要な意味を持つと考えられる。

スポーツにおける勝利志向については、Webb (1969) が独自に開発した専門化尺度 (Professionalization Scale) を皮切りにして、スポーツに対する態度として扱われてきた (小椋ら, 1977; Coakley, 1981; Knoppers, 1985; Knoppers et al.; 1989)。Webbによれば、子供の勝利志向は学年が進むにつれて勝利志向が強くなることが示されている。しかしながら、性別や信仰、人種などによってその傾向は異なっており、また、全体的に、プレイすること自体に価値を置くベスト志向やフェアプレイを志向するフェア志向の方が、勝利志向よりも強いことが明らかになっている。日本においても、小椋ら (1977) が Webb の尺度を用いて年齢の増加に伴う勝利志向の変化を、中学生と成人のサンプルを使って報告している。中学生と成人のいずれにおいてもベストを尽くすことに価値を置くベスト志向が最も強いものの、勝利志向については中学生の方が成人よりも強いことが明らかにされている。つまり、年齢とともに勝利志向が強まると考えるよりも、中学生期における勝利志向が強いと捉えるほうが適当であろう。

一方、Webbの専門化尺度が対象者に対して、「勝利志向」「ベスト志向」「フェア志向」のそれぞれについて重視する順に順位付けを求めていることから、尺度についての問題点を指摘する声も見られる (Coakley, 1982; Knoppers, 1985; Knoppers et al.; 1989)。Knoppersら (1986) は、ゲーム志向尺度 (Game Orientation Scale) を作成して、2つの状況設定、すなわち友人や家族とスポーツを行う場合と州のチャンピオンシップに出場した場合を設定して、それぞれの状況について5段階のリッカートタイプの尺度による測定を行っている。この状況設定は、一口にスポーツ参加といっても、その状況によって態度が異なるとする前提に立つもので、スポーツ参加状況を仮定してやることで対象者のスポーツ参加を均質化し

ようとするものである。

いずれにせよ、子供たちのスポーツに対する態度は、先述したように成人期以降のスポーツ参加の態度形成に重要な意味を持つものであり、実際にプログラムに参加している者がどのような態度、志向を持っているのか測定することは、青少年スポーツプログラムの在り方を考えていく上で、意義のあることと思われる。そこで本研究では、レクリエーション・プログラムから競技力向上プログラムまで幅広く用意されている、カナダの地方都市における地域スポーツプログラムに参加する青少年のスポーツに対する志向を、特に、性別やスポーツ実施状況による差異について明らかにすることを目的としている。

## 方 法

### 1. 調査の概要

本研究では、カナダ国オンタリオ州キッチェナー市が認定する青少年スポーツ団体 (Affiliated Minor Sport Groups: 以下「連携スポーツ団体」と略す。) のメンバーを対象とした。連携スポーツ団体は、ある一定の基準を満たした非営利団体で、キッチェナー市から補助金の交付等の優遇措置を受けて市民に対するスポーツプログラムの提供を行っており、2000年6月現在で36の団体が認定を受けていた (北村, 2000)。これら連携スポーツ団体のうち調査の協力が得られた10の団体に対して、2000年4月1日から2000年7月20日にかけて、所定の質問紙による調査を実施した。その結果、9歳から20歳の参加者202名より回答を得た。

調査内容は、1) 個人的属性、2) スポーツ実施状況、3) スポーツへの志向、4) スポーツライフスタイル等に関する項目である。スポーツへの態度については、Webb (1969) が作成した尺度を用いた。

### 2. 分析方法

スポーツへの志向については、Webb (1969) が作成した尺度に基づいて、ベスト志向、勝利志向、フェア志向のそれぞれについてプレイする際に重視する順に、1から3の順位をつけるよう求

めた。さらに、Webb の尺度に対して、順序付けによって強制的に回答を求めることの妥当性への指摘もある (Coakley, 1982; Knoppers, 1985; Knoppers et al.; 1989) ことから、同じ質問項目について5段階のリッカートタイプ尺度で測定した。「非常にそう思う (Strong agree)」から「全くそう思わない (Strong disagree)」までの5段階評定順にそれぞれ1から5までの得点を与え、間隔尺度を構成するものとして数量化した。そして性別、実施頻度、継続年数、競技レベルを独立変数として、それぞれ平均値を算出して比較した。

Webb の尺度については、先述したように測定についての妥当性や状況設定の曖昧さが指摘されている。しかしながら、本研究ではスポーツプログラムへの参加者を対象としており、スポーツ参加の状況設定は自ずとそれぞれの参加者が活動する場に等しくなると考え、また、Webb が試みたような、回答パターンの組み合わせによる専門性の程度の測定は本研究では目的としないことから、Knoppers ら (1986; 1986) や Greer ら (1989) が行ったような細かな状況設定は行わなかった。

## 結果及び考察

### 1. サンプルの属性とスポーツ実施状況

サンプルの属性を表1に示している。性別では女性が60.7%に対して男性が39.3%で、女性のサンプルがやや多い結果となった。学年では8年生

表1. サンプルの属性

		n	%
性別	男性	122	60.7
	女性	79	39.3
学年	6年生以下	17	9.0
	7年生	20	10.0
	8年生	43	21.4
	9年生	36	17.9
	10年生	10	5.0
	11年生	18	9.0
	12年生	28	13.9
	13年生以上*	23	11.4
	N.A.	5	2.5
居住地	キツェナー	144	71.6
	ウォータールー	35	17.4
	その他	21	10.4
	N.A.	1	0.5

\*大学生を含む

(Grade8)が21.4%、次いで9年生 (Grade9: 17.9%)、12年生 (Grade12: 13.9%)と続き、全体としては日本の中学生とほぼ同年代にあたる7年生 (Grade7) から9年生 (Grade9)の者が半数近くを占めている。今回対象としたのは、キツェナー市が認定するスポーツ団体に所属している選手たちであるが、サンプルの居住地についてはキツェナー市内在住の者が71.6%と7割を占めており、隣接するウォータールー市居住者が17.4%、その他の地区に居住する者が10.4%であった。

次に、サンプルのスポーツ実施状況について述べる (表2)。まず、種目別の割合を見てみると、

表2. スポーツ実施状況

		N	%			N	%	
所属クラブ	インラインホッケー	11	5.5	継続年数				
	サッカー	36	17.9		1年未満	32	15.9	
	スケート	19	9.5		1年以上4年未満	57	28.4	
	シンクロサイズド・スイミング	23	11.4		4年以上6年未満	41	20.4	
	柔道	1	0.5		6年以上	57	28.4	
	漕艇	9	4.5		N.A.	14	7	
	ソフトボール	56	27.9		min.=0, max.=14.00 mean=4.30, S.D.=3.39			
	フットボール	32	15.9		活動頻度 (週あたり)	N	%	
	空手	6	3			1-2回	74	36.8
	体操	8	4			3-4回	62	30.8
競技レベル	ハウスリーグ	94	46.8	5回以上	58	28.9		
	オールスター	23	11.4	N.A.	7	3.5		
	州大会	52	25.9	min.=1, max.=9 mean=3.54, S.D.=1.86				
	全国大会	24	11.9					
	N.A.	8	4					

ソフトボールが27.9%で最も多く、以下サッカー(17.9%)、フットボール(15.9%)、シンクロサイズド・スイミング(11.4%)の順であった。競技レベルは、市内でのリーグに参加するハウスリーグ(House League)が46.8%で半数弱を占めており、次に多かったのは州レベル(Regional/Provincial)と答えた者(25.9%)である。以下、全国大会に出場するナショナルレベル(11.9%)、周辺地域との大会に出場するオールスター(All Star: 11.4%)の順で、いろいろな競技レベルの選手によってサンプルが構成されていることがわかる。プログラムの面的には、ハウスリーグのレベルがレクリエーション・プログラム、オールスター以上のレベルが競技力向上プログラムに該当する。よって、レクリエーション、競技力向上それぞれのプログラムへの参加者が、約半数づつの割合を占めていると捉えてよいだろう。各種目の継続年数を尋ねたところ、6年以上の者と1年以上4年未満の者が同数で(28.4%)、次いで4年以上6年未満(20.4%)、1年未満(15.9%)の順であり、平均継続年数は4.3年という結果であった。また、1週間あたりの活動回数では、1~2回が最も多く(36.8%)、以下3~4回(30.8%)、5回以上(28.9%)と続き、1週間あたりの平均活動回数は3.54回であることがわかった。

ところで、サンプルの競技レベルによって継続年数や活動頻度が異なることは十分に予想される。そこで、競技レベルと継続年数、1週間あたりの活動頻度の関連を示したのが表3である。継続年

表3. 競技レベルと継続年数、活動頻度

	ハウス リーグ	オール スター	州	全国
継続年数 $\chi^2=12.30$ df=9 N.S.				
1年未満	22.9	17.4	15.4	0.0
1年以上4年未満	31.3	17.4	34.6	29.2
4年以上6年未満	16.9	21.7	25.0	33.3
6年以上	28.9	43.5	25.0	37.5
活動頻度(週あたり) $\chi^2=112.40$ df=6 p<.005				
1-2回	66.7	21.7	11.5	0.0
3-4回	30.1	65.2	19.2	28.6
5回以上	3.2	13.0	69.2	71.4

数においては有意な関連は見られなかったが、オールスターのレベルでは4割以上の43.5%が6年以上継続していることが明らかになった。また全国レベルの選手たちも継続年数が長くなるにつれて、その割合も多くなることが明らかである。

一方、活動頻度については競技レベルとの間に有意な関連が見られた。すなわち、競技レベルが高い者ほど1週間あたりの活動頻度も多くなることが明らかである。このことはレクリエーション・プログラムと競技力向上プログラムの内容の違いが影響を及ぼしていると考えられる。たとえば、体操クラブのプログラムを見た場合、レクリエーション・プログラムは1週間に1回開催されるのに対して、競技力向上プログラムは1週間に3回から5回開催されるようになっている。つまり、レクリエーション・プログラムか競技力向上プログラムかによって、活動頻度がある程度規定されるのである。

## 2. スポーツに対する志向

試合をする際に重視する点について、Webb(1969)が用いた3項目、すなわち「ベストを尽くすこと(To play it as well as you are able: ベスト志向)」「相手に打ち勝つこと(To play to beat your opponent: 勝利志向)」「フェアにプレイすること(To play it fairly: フェア志向)」について尋ねた。まず、最も重視する順に1から3の順位をつけるよう求め、その結果を表4に示している。第1位と回答した者が最も多かったのはベスト志

表4. スポーツに対する志向(順位)

順位	ベスト志向		勝利志向		フェア志向	
	n	%	n	%	n	%
1位	128	63.7	18	9.0	31	15.4
2位	46	22.9	24	11.9	107	53.2
3位	3	1.5	135	67.2	39	19.4
N.A.	24	11.9	24	11.9	24	11.9

Question:

What do you think is most important in playing a game?  
Number the items below from 1 to 3, starting with the one you think is MOST important (1), and finishing with the one you think is LEAST important (3)...

- \_\_\_ to play it as well as you are able
- \_\_\_ to play to beat your opponent
- \_\_\_ to play it fairly

が最も多かったのは勝利志向 (67.2%) であった。次にそれぞれの志向について、「全く当てはまる」から「全く当てはまらない」までの5段階のリッカートタイプ尺度によって測定した5段階評定順に、1から5までの得点を与えて間隔尺度を構成するものと仮定して数量化した。つまり、得点が低いほどその志向が強いと捉えることができる。表5はサンプル全体の平均得点を求めた結果である。最も値が低かった、すなわち志向が強かったのはベスト志向 (1.36) で、次いでフェア志向 (1.57)、勝利志向 (2.56) の順で、先に述べた順位付けによる結果と併せても、勝敗よりも自己の持っている能力を十分に発揮してベストを尽くそうとする態度や、正々堂々と競技しようとする態度が強いことが明らかである。

次に、性別、学年、活動頻度別、継続年数別、競技レベル別のそれぞれで各志向について平均値

表5. スポーツに対する志向 (平均値)

	N	Mean	S.D.
ベスト志向	199	1.36	0.76
勝利志向	200	2.56	1.27
フェア志向	200	1.57	0.84

を算出して比較した。その結果、性別、学年、継続年数、競技レベルのそれぞれで、勝利志向に有意な差があることが明らかになった。

まず性別では、表6に示しているように女性 (2.82) よりも男性 (2.15) で勝利志向が強いことが明らかになった ( $p < .005$ )。一方、有意ではないものの、ベスト志向 (女性1.30, 男性1.47) とフェア志向 (女性1.51, 男性1.66) では、女性の方が低い値を示しており男性よりも強いことが

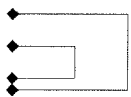
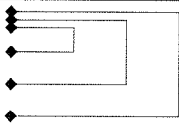
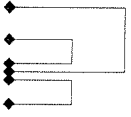
表6. 性別とスポーツに対する志向

	性別	N	Mean	S.D.	t
ベスト志向	女性	122	1.30	0.65	-1.46
	男性	77	1.47	0.90	
勝利志向	女性	121	2.82	1.27	3.75*
	男性	79	2.15	1.16	
フェア志向	女性	121	1.51	0.75	-1.15
	男性	79	1.66	0.95	

\* $p < .005$ 

明らかである。次に、学年による差異を検討してみる (表7)。学年を日本の小学6年生までの年代に相当する6年生以下、中学生の年代に相当する7年生から9年生、高校生の年代に相当する10

表7. 学年とスポーツに対する志向

	学年	N	Mean	S.D.	F	LSD $p < .05$
ベスト志向	6年生以下	18	1.22	0.55	2.96*	
	9年生以下	99	1.28	0.66		
	12年生以下	54	1.63	1.03		
	13年生以上	23	1.26	0.45		
	Total	194	1.37	0.77		
勝利志向	6年生以下	18	3.44	1.46	3.81*	
	9年生以下	99	2.44	1.20		
	12年生以下	56	2.38	1.27		
	13年生以上	23	2.65	1.11		
	Total	196	2.54	1.26		
フェア志向	6年生以下	18	1.33	0.59	3.50*	
	9年生以下	99	1.55	0.76		
	12年生以下	55	1.84	1.08		
	13年生以上	23	1.26	0.45		
	Total	195	1.57	0.84		

\* $p < .05$

表 8. 継続年数とスポーツに対する志向

	継続年数	N	Mean	S.D.	F	LSD p<.05
ベスト志向	1年未満	32	1.19	0.40	1.03	
	1年以上4年未満	57	1.40	0.73		
	4年以上6年未満	39	1.44	0.85		
	6年以上	57	1.28	0.70		
	Total	185	1.34	0.70		
勝利志向	1年未満	32	2.22	1.07	2.71*	◆
	1年以上4年未満	57	2.39	1.10		
	4年以上6年未満	41	2.98	1.51		
	6年以上	56	2.52	1.24		
	Total	186	2.53	1.25		
フェア志向	1年未満	32	1.56	0.67	0.11	
	1年以上4年未満	56	1.61	0.87		
	4年以上6年未満	41	1.54	0.87		
	6年以上	57	1.53	0.76		
	Total	186	1.56	0.80		

\*p&lt;.05

年生から12年生，それ以上の4グループに分けて平均値を比較した．ベスト志向，勝利志向，フェア志向のいずれにおいても5%水準で有意な差が認められた．ベスト志向とフェア志向は高校生の年代で最も弱くなり，同時に勝利志向がこの年代で最も強くなることが明らかである．これまでの研究（Webb, 1969；Loy et al., 1976；小椋ら, 1977；Greer and Lacy, 1989など）では，女性よりも男性の勝利志向が強く，女性においては男性よりもベスト志向とフェア志向が強いこと，また，中学生期から高校生期にかけて勝利志向が強まることも報告されており，それらの報告を裏付ける結果である．

継続期間との関連（表8）を見てみると，継続期間が1年未満の者（2.22）が最も勝利志向が強いことが示されている（ $p<.05$ ）．1年以上4年未満の者も2.39という値を示しており，継続期間が短い者ほど勝利志向が強い傾向がうかがえる．その一方で，1年未満の者はベスト志向において，他のグループと比べて低い値（1.19）を示している．このことから，継続期間が長くなるにつれてその種目において社会化が進み，勝つことに価値を見出そうとする態度から，自己の技能やゲーム

そのものに価値を見出そうとする態度に変化していくものと思われる．

さらに，競技レベルごとに見てみると，勝利志向が最も強かったのは近隣都市とのリーグに出場するオールスターのグループ（2.00）で，それに対して，全国レベルのグループが最も勝利志向が弱い（3.21）という結果であった（表9）．その一方で，ベスト志向では逆の傾向が現れている．すなわち，オールスターは他のグループに比べて高い値（1.59）を示し，全国レベルのグループは，勝利志向の値（3.21）に対して低い値（1.33）を示している．有意な結果ではないものの，全国レベルの選手たちが勝敗よりも，よりレベルの高い舞台で自分の力を出し切ることを重視している様子がうかがえる．

1週間あたりの活動頻度ごとでは，ベスト志向，勝利志向，フェア志向のいずれにおいても，有意な差は認められなかった（表10）．傾向としては，週1回から2回のグループが，勝利志向が最も弱く（2.78），週3回から4回活動しているグループの勝利志向が最も強かった（2.27）．活動頻度は競技レベルと関連があることは先に述べたとおりであり，このことが影響を及ぼしていると考え

表9. 競技レベルとスポーツに対する志向

	競技レベル	N	Mean	S.D.	F	LSD p<.05
ベスト志向	ハウスリーグ	94	1.27	0.66	1.49	
	オールスター	22	1.59	1.01		
	州大会	51	1.27	0.49		
	全国大会	24	1.33	0.64		
	合計	191	1.31	0.67		
勝利志向	ハウスリーグ	93	2.63	1.18	4.14*	
	オールスター	23	2.00	1.17		
	州大会	52	2.42	1.24		
	全国大会	24	3.21	1.44		
	合計	192	2.57	1.26		
フェア志向	ハウスリーグ	93	1.56	0.85	1.77	
	オールスター	23	1.83	0.89		
	州大会	52	1.40	0.63		
	全国大会	24	1.42	0.65		
	合計	192	1.53	0.79		

\*p<.01

表10. 活動頻度とスポーツに対する志向

	活動頻度	N	Mean	S.D.	F	LSD p<.05
ベスト志向	1-2回	74	1.35	0.80	0.00	
	3-4回	60	1.35	0.71		
	5回以上	58	1.36	0.72		
	Total	192	1.35	0.74		
勝利志向	1-2回	74	2.78	1.20	2.82	
	3-4回	62	2.27	1.30		
	5回以上	58	2.53	1.26		
	Total	194	2.55	1.26		
フェア志向	1-2回	73	1.55	0.82	0.09	
	3-4回	62	1.55	0.84		
	5回以上	58	1.60	0.84		
	Total	193	1.56	0.83		

られる。一方、ベスト志向とフェア志向においては、活動頻度による差はほとんど認められなかった。

### 結 語

本研究では、カナダにおける地域スポーツプログラムに参加する青少年のスポーツに対する志向を明らかにし、性別やスポーツ実施状況による比較を行ってきた。そのため、オンタリオ州キッチンエナー市の連携スポーツ団体 (Affiliated Minor Sport Groups) のメンバーに対する質問紙調査を行い性

別、学年、継続年数別、活動頻度別、競技レベルとスポーツに対する志向との関連について検討を行った。その結果、青少年のスポーツに対する志向は、試合の際には自分が持っている力を十分に発揮しようとするベスト志向が最も強く、そのことは男性よりも女性のほうで顕著であることが明らかになった。また、勝利志向は中学校期から高校期にかけて最も強くなり、その種目の継続年数が短い者ほど試合において勝つことに価値を見出す勝利志向が強く、逆に継続年数が長くなるにつれてベスト志向が強くなることが示された。さら



に、全国レベルの選手の勝利志向はそれほど強くなく、むしろベスト志向のほうが強いことが明らかになった。これらの結果からは、スポーツに対する志向がスポーツに社会化されていく過程で変化していく様子が窺える。すなわち、強い勝利志向を持ってクラブに入会しても、継続していく中で技術レベルや競技レベルが上がるにつれて、ベスト志向やフェア志向が強くなるのである。

日本において子供のスポーツを巡っては、一部に見られるような勝利至上主義がとかく問題となる。残念ながら、これまでの日本における青少年のスポーツ活動は、地域ではスポーツ少年団以外には組織的な活動はほとんどされておらず、学校運動部活動に大きく依存することを余儀なくされ、制度的にも勝利至上主義を生み出す土壌があったことが否めない。2010年度までに全市町村に総合型地域スポーツクラブを設置するという政策目標が示され、学校運動部と地域スポーツクラブとの連携も模索され始めている現在、日本における青少年スポーツ活動も転機にあると言えるだろう。この機会を有効に活用し、青少年スポーツ活動が、生涯スポーツへの態度形成にポジティブに作用するようなシステム作りが急務である。

## 文 献

- Coakley, J. : The professionalization of attitude scale: What does it measure?. The sport sociology academy newsletter, pp.7-11, 1981.
- Coakley, J. : Sport in society: Issues and controversies (2nd ed.), St. Louis: C.V. Mosby, 1982.
- 藤田雅文・藤原誠：スポーツ少年団の活動，四国スポーツ研究会編，子どものスポーツ，その光と影ー生涯スポーツに向けてー，不昧堂出版，1992，pp.53-91.
- Greer, D.L. and Lacy, M.G. : On the conceptualization and measurement of attitudes toward play: The Webb scale and the GOS. *Sociology of sport journal* 6, pp.380-390, 1989.
- 北村尚浩：カナダの地域スポーツクラブーCity of Kitchener の Affiliated minor sports groups. *体育の科学* 50 (9), pp.749-753, 2000.
- Knoppers A. : Professionalization of attitudes: A review and critique. *Quest* 37 : p.p.92-102, 1985.
- Knoppers, A., Zuidema, M., Meyer, B.B. : Playing to win or playing to play?. *Sociology of sport Journal* 6, pp.70-76, 1989.
- 小椋博・森川貞夫・枝村亮一：スポーツに対する態度，特に勝利志向の分析ー「スポーツへの社会化」に関する国際調査からー，スポーツ参与の社会学，道徳書院，pp. 57-68, 1977.
- Loy, J.W., Birrell, S. and Love, B. : Attitudes held toward agonetic activities as a function of selected social identities. *Quest* 26, pp.81-93, 1976.
- 松尾哲矢・多々納秀雄・大谷善博・磯貝博久・舟越美津：スポーツ競技者のバーンアウトに関する実証的研究ースポーツ少年団員をめぐってー。日本体育学会第41回大会号A, p127, 1990.
- McPerson, B.D., Marteniuk, R., Tihanyi, J. and Clark, W. : The social system of age group swimming: The perceptions of swimmers, parents, and coaches. *Canadian Journal of Applied Sport Science* 5 (3), pp.142-145, 1980.
- 文部省体育局：スポーツ振興基本計画，文部省，2000.
- 文部省体育局体育課：中学生・高校生のスポーツ活動に関する調査結果の概要について。スポーツと健康 28 (12), pp.28-34, 1996.
- 尾縣 貢：学校における体育・スポーツに関する指導の改善・充実ー運動部活動を中心にしてー。中等教育資料 49 (8), pp.20-25, 2000.
- 落合優：中学生・高校生のスポーツ活動の意義と課題。中等教育資料 46 (2), pp.20-25, 1997.
- Orlick, T. : The athletic dropout: A high price for inefficiently. *CAHPER Journal* 41 (2), pp. 21-27, 1974.
- Webb H. : Professionalization of attitudes toward play among adolescents. *Aspects of contemporary sport sociology*, pp.161-188, 1969.